

スタインベックに於ける「水」の役割  
——『はつかねずみと人間』を通して——

成 田 奈 央

## 序論

「生命の根源」としての「水」——。

「水」(water)なくしてジョン・アーンスト・スタインベック(John Ernst Steinbeck, 1902~1968)の作品を語ることは出来ない。このように述べたとしても決して過言ではないだろう。また言い換えれば、それ程に彼の作品の中で「水」が果たしている役割は大きいのである。

ここでは、スタインベックの世界が集約されていると言える『はつかねずみと人間』(Of Mice and Men, 1937)を取り上げ、スタインベック文学の本質を担っている「水」の重要性を捉えていきたいと思う。また同時に、常に「水」と呼応し、作品の要所要所に配される柳(willow)と葦(reed)、更には「水」の存在が絶対必要条件となっている「洞穴」(cave)についても併せて取り組んでいくこととしたい。

本論文では、第1章で「水」に、第2章で柳と葦に、そして第3章では「洞穴」にそれぞれ光を当てていきたいと思う。

## 第1章

A few miles south of Soledad, the Salinas River drops in close to the hillside bank and runs deep and green. The water is warm too, for it has slipped twinkling over the yellow sands in the sunlight before reaching the narrow pool. <sup>(1)</sup>

サリーナス川(the Salinas River)の豊かな流れが作品の冒頭を飾

っている。即ち、そこには他でもない「水」(water)の姿が描かれているのである。このことから、スタインベックの作品にとって「水」が如何に大切なものであるかを窺い知ることが出来るであろう。加えて、登場人物が見せる最初の主だった動きがLennieの「水」を飲むという行為であり、更にはGeorgeとLennieの間で交わされる会話が「水」に関するもので始まっていることが、「水」の存在をよりクローズアップさせる効果を上げているのである。

スタインベック文学に於ける「水」には、主として「生命の根源」を初め、「浄化作用」、「救済」の役目、そして「安らぎ」をもたらす存在といった意味合いが託されている。

この作品の中で“water”の頻度は計24回を数える。また、「水」に関連する単語は作品全体を通して多く見受けられる。代表的なものが淵(pool)と川(river)であり、それぞれ21回使われている。

上に引用した“The water is warm too,”という表現は、「生命の根源」であるからこそ温かい、命の温もりを伝える「水」の姿をよく表わしている。生命にとって「水」が不可欠なものであることは誰もが知るところである。Lennieは“The rabbits we're gonna get, and I get to tend 'em, cut grass an' give 'em water, an' like that.”<sup>(2)</sup>と語り、餌である草(grass)と並んで「水」についても触れることを忘れてはいない。「水」が存在してこそ初めて生命は可能となる。そのことを物語る発言である。

次に、「水」が「浄化作用」を持つことは、サクラメント川(the Sacramento River)での出来事を境に、GeorgeのLennieに対する接し方が変わったというエピソードによって明らかである。それまで再三にわたってLennieをからかい、優越感に浸っていたGeorgeがそれを止めた理

由には2つある。1つが“‘An’ he was so damn nice to me for pullin’ him out. Clean forgot I told him to jump in.’”<sup>(3)</sup>に示されるようなLennieの純真さであることは間違いない。しかし、ここで見落としてならないのは「水」の持つ「浄化作用」である。これが正しくもう1つの理由なのである。サクラメント川の「水」がGeorgeの卑劣さを清めたと考えられる。そしてその時、その場所で真の友情が芽生えたのである。

続いて、“‘The guys in Weed start a party out to lynch Lennie. So we sit in a irrigation ditch under water all the rest of that day.’”<sup>(4)</sup>とある通り、用水路の「水」に身を潜めていたことによってLennieはリンチを免れた。「水」がLennieの命を守ったのである。ここに「水」の「救済」という役目を読み取ることが出来るのである。

最後に、GeorgeとLennieが自分達の思い描く「安住の地・エデン」について語り合った場所に着目したい。作品の中で初めて彼らの夢が語られる場所、その近くには「水」があった。次の働き先である農場へ向かう途中、彼らが立ち寄り、そして夢を語り合う場はやはり「水」辺の「空き地」(clearing)でなくてはならなかったはずである。なぜなら、今以て「ピロング」(belong)する土地を持たないGeorgeとLennieにとって、傍らに「水」の流れるその「空き地」こそが真の「安らぎ」を与えてくれる唯一の場所であったからに他ならない。このことは、Georgeの

‘I like it here. ... Tonight I’m gonna lay right here and look up. I like it.’”<sup>(5)</sup>

という言葉にも如実に表われている。まして、サリダッド(Soledad)の農場に一步足を踏み入れてみると、不安材料が次々と浮かび上がってきたのである。そして、それらの不安材料とはGeorgeとLennieが、

“Now we got to be careful and not make no slips.”<sup>(6)</sup> や  
“This here ain't no set up, I'm scared, You gonna have trouble  
with that Curley guy.”<sup>(7)</sup>、そして “I don' like this place,  
George, This ain't no good place, I wanna get outa here.”<sup>(8)</sup> と感  
じるような、2人の未来に暗い影を落としかねない危険性を孕むもので  
あった。従って、農場に着いてから僅か3日で儚くも「エデン」への道  
を絶たれたGeorgeとLennieは、「水」辺での語らいとそこで過ごした時  
間に事実上最後の「安らぎ」を得ていたと言えるのではないだろうか。  
「水」が2人にしばしの「安らぎ」と休息を与えたのである。しかしな  
がら、Georgeが話を打ち切ってしまうことは、夢の挫折を暗示している  
かのようである。

## 第2章

次に、「水」と深い結び付きを持つ柳 (willow) と葦 (reed) を取り  
上げていきたい。“willow” は6回、そして “reed” は2回出てきている。

柳と葦が「水」と共に登場していることは、“... but on the valley  
side the water is lined with trees—willows fresh and green with  
every spring...”<sup>(1)</sup> や “The reeds jerked slightly in the  
current.”<sup>(2)</sup> を見れば明白である。

「水」がある所に柳と葦は布置される。反対に、柳と葦が生えている  
場所には必ず「水」が存在する。

このような配置は「水」・柳・葦、この三者が決して切り離せないも  
のであるということを伝えている。そしてこの三者は、担っている役割  
もまた同じなのである。

“‘Sure we are, if you gather up some dead willow sticks. . . . You get a fire ready. . . . Then we’ll heat the beans and have supper.’”<sup>(3)</sup>では、柳の枝は食糧である豆を温めるために必要とされている。柳が「水」と並んで生命の営みを支えている証である。更に、  
“‘Bring your bundle over here by the fire. It’s gonna be nice sleepin’ here.’”<sup>(4)</sup>とある通り、柳をくべたその焚き火は心地良い眠りをGeorgeとLennieにもたらすのである。毛布1枚身に纏うだけで戸外の夜を過ごせるのは、「水」と柳が彼ら2人を「保護」してくれるからである。「水」があり、柳と葦が生える場所では「母親」に見守られている時のような安心感に包まれるのである。そして2人はそこでの休息によって、新しい生活への活力を得るのである。

また、この作品の中で柳と葦に近い働きをしているのが、スズカケの木 (sycamore) ではないかと思われる。“sycamore”の頻度は10回である。“... and sycamores with mottled, white, recumbent limbs and branches that arch over the pool.”<sup>(5)</sup>や“‘But by the pool among the mottled sycamores, a pleasant shade had fallen.’”<sup>(6)</sup>から、スズカケの木が淵の辺に立っていることがわかる。加えて、“... and a half darkness came in among the willows and the sycamores.”<sup>(7)</sup>とあるように、柳と並んで置かれている点にも注目すべきであろう。そしてスズカケの木が薪を取りに行く際、場所を知る手掛りとなっていることが、“‘There’s plenty right up against the back of that sycamore.’”<sup>(8)</sup>に示されている。これはスズカケの木も生命を少なからず支えていることを意味しているのである。使われている回数こそ多いとは言えないものの、大きな存在感を残している。スズカケの木は作品に確かな彩りを添えているのである。

### 第3章

続いて、スタインベック文学の中でこれもまた非常に重要な役割を果たしている「洞穴」(cave)について考えていきたいと思う。

スタインベックが言うところの「洞穴」とは、「安らぎの場」であり、「救いの場」であり、「再生の場」である。また、それはある意味に於いて「安住の地・エデン」を表わすものでもある。

そしてそれ故に、「洞穴」が語られる際、そこには常に「水」との関わり合いがあるのだ。つまり、人が生きていく上で求めずにはいられない「洞穴」であればこそ、「生命の根源」である「水」が用意されるのは当然のことなのである。

Well, I could. I could go off in the hills there. Some place I'd find a cave.'<sup>(1)</sup>

これはLennieの言葉である。この引用を初めとして、“cave”という単語は6回とも全てLennieの台詞の中で用いられている。自分を守ってくれる人物は今やGeorge、ただ1人である。そのGeorgeの元を離れても尚、「洞穴」ならば生きていくことが出来ると彼が考えるのは一体何故だろうか。それはそこが「救いの場」だからなのである。そして「洞穴」に住むことは、Lennieに残された最後の切り札とすることが出来るであろう。また、“‘I'd lay out in the sun and nobody'd hurt me. An' if I foun' a mouse, I could keep it. Nobody'd take it away from me.’”<sup>(2)</sup>という発言は、Lennieにとって丘に見つけんとするその「洞穴」が1つの「エデン」であることを我々に伝えている。

'Lennie—if you jus' happen to get in trouble like

you always done before, I want you to come right here an' hide in the brush.' (3)

“Hide in the brush”——このフレーズはこの後11回登場する。繰り返されることによって茂みの存在は強く印象に残るのである。この発言からGeorgeが茂みに「救いの場」を求めていたことは確かである。そして更には、ウィード (Weed) で2人を救ったのが用水路であったように、再び困難な事態に直面したとしても、茂みが自分達の「再生の場」となってくれることを期待していたに違いないのである。また、茂みが「救いの場」であることは、“Lennie hesitated, backed away, looked wildly at the brush line as though he contemplated running for his freedom.” (4) のような描写にもさり気なく表わされていると感じる。

今述べてきたような茂みに囲まれた場所、そこが「空き地」である。とりわけ「空き地」は、「洞穴」たるものが象徴する3つの意味合い——「安らぎの場」・「救いの場」・「再生の場」——を物語の展開の中で順次示している。

まず、作品の始まりに於いて「空き地」が「安らぎの場」であったことは、第1章で既に述べた通りである。「水」があり、柳と葦が見守る「空き地」はGeorgeとLennieのみならず、生あるもの全てを受け止めてくれる、この上ない「安らぎの場」なのである。ところが、「空き地」は「安らぎの場」というただ1つの意味に止まるものではない。“‘Look, Lennie, I want you to look around here, You can remember this place, can't you?’” (5) の“here”及び“this place”とは「空き地」のことである。Georgeは「空き地」を「救いの場」と見なし、それ故Lennieに対して問題を起こした時にはそこへ身を隠すよう指示するので

ある。この時点で「空き地」はもはや「安らぎの場」としてだけでなく、「救いの場」としての様相をも呈するのである。そして実際に、Curleyの妻を死に至らしめてしまったLennieは「救いの場」を求めて戻ってきたその同じ「空き地」で、自らも命を落とすことになる。だが、彼の死は果たしてこの作品を明かりの見えぬ結末へと導くのだろうか。否、そうではあるまい。そのことは「空き地」の持つもう1つの意味を考えれば自ずとわかってくる。“Lennie jarred, and then settled slowly forward to the sand, and he lay without quivering.”<sup>(6)</sup>や“The group burst into the clearing, and Curley was ahead. He saw Lennie lying on the sand.”<sup>(7)</sup>とある通り、Lennieは「空き地」の「砂」の上で最期を遂げたのである。命の「水」が流れる「空き地」は「再生の場」と呼ぶにふさわしい。即ち、我々はLennieが生まれ変わってくる可能性を感じずにはいられないのである。Lennieは一度「俗世界から原始の無垢な世界へ避難」(a retreat from the world to a primeval innocence)<sup>(8)</sup>し、その後「母親の胎内へ帰って再生」(a return to the womb and rebirth)<sup>(9)</sup>するに違いないのである。そしてGeorgeもまた、深い悲しみを負いながらもサリーナス川の川辺を新たな出発の場として力強く生きていけるのではないだろうか。

## 結論

「水」はスタインベック文学に限りなき命を吹き込む。言葉を変えれば、スタインベックの思いを彼の筆によって描かれた「水」が伝えているのである。

『怒りの葡萄』(The Grapes of Wrath, 1939)を初め、『エデンの東』

(East of Eden, 1952)、『赤い小馬』 (The Red Pony, 1937) といった諸作品を手にとってみれば明らかなように、スタインベック文学には度々「水」が姿を現す。そして、今回取り上げた『はつかねずみと人間』に於いても、「水」とその「水」の存在を必要とする「洞穴」が大きく語られている。この両者は作品を、また作者を解する上での極めて重要な役割を担うものである。『はつかねずみと人間』、この作品にも我々はスタインベック文学の本質を見ることが出来る。

物語が、たとえどれ程悲しむべき結末を迎えたとしても、読者はそこに一筋の光を見出し得る。それを可能にしているのが、他ならぬ「水」なのである。彼の作品の中で「水」が持つ重みは計り知れない。

…スタインベック文学は水の文学と言えよう。水あるが故に存在する文学である。<sup>(1)</sup>

生あるものにとって「水」がなくてはならないものであると同様に、スタインベック文学にとっても「水」は決して欠くことの出来ない要素なのである。

## 註記

### <第1章>

(1) John Steinbeck, Of Mice and Men (Complete and Unabridged),  
Edited with Notes by Takashi Sugiki (Tokyo Nan'un-do, 1954),  
Chap. 1, p. 1.

(2) Ibid., Chap. 4, p. 75.

(3) Ibid., Chap. 3, p. 43.

(4) Ibid., Chap. 3, p. 45.

- (5) *Ibid.*, Chap. 1, p. 8.
- (6) *Ibid.*, Chap. 2, p. 25.
- (7) *Ibid.*, Chap. 2, p. 31.
- (8) *Ibid.*, Chap. 2, p. 35.

### 〈第2章〉

- (1) John Steinbeck, *Of Mice and Men*, Chap. 1, p. 1.
- (2) *Ibid.*, Chap. 1, p. 8.
- (3) *Ibid.*, Chap. 1, p. 8.
- (4) *Ibid.*, Chap. 1, p. 17.
- (5) *Ibid.*, Chap. 1, p. 1.
- (6) *Ibid.*, Chap. 6, p. 107.
- (7) *Ibid.*, Chap. 1, p. 11.
- (8) *Ibid.*, Chap. 1, p. 11.

### 〈第3章〉

- (1) John Steinbeck, *Of Mice and Men*, Chap. 1, p. 3.
- (2) *Ibid.*, Chap. 1, p. 14.
- (3) *Ibid.*, Chap. 1, p. 17.
- (4) *Ibid.*, Chap. 1, p. 9.
- (5) *Ibid.*, Chap. 1, p. 17.
- (6) *Ibid.*, Chap. 6, p. 115.
- (7) *Ibid.*, Chap. 6, p. 115.
- (8) Peter Lisca ed., *The wide world of John Steinbeck* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1958), p. 135.

(9) *ibid.*, p. 135.

〈結論〉

- (1) 稲澤 秀夫 『ジョン・スタインベック文学の研究』 (学習院大学  
研究叢書28、第一法規出版、1995)、p. 78.

使用テキスト

1. Steinbeck, John, Of Mice and Men (Complete and Unabridged)  
Edited with Notes by Takashi Sugiki, Tokyo, Nan'un-do, 1954